

研究戦略センター

研究戦略センターは、文化人類学・民族学とその周辺諸分野の最新の研究動向を踏まえ、機関研究をはじめとする本館の研究活動の戦略を策定することを目的として、平成16年4月に新たに設置されました。

平成23年度事業

研究戦略の策定

文化人類学・民族学研究の研究動向調査と情報の発信

我が国における文化人類学・民族学の研究センターとして、国内外の最新の研究動向を把握して館内外に情報発信しています。そのために「民族学・文化人類学の研究動向と学術的・社会的ニーズの調査、さらに、そのための他の研究機関との協力関係の構築に関する研究」という研究プロジェクトを立ち上げ、リサーチ・アシスタントを採用して調査をおこなっています。その結果は、毎年度末に発行する「研究戦略センター活動報告」に報告されています。

文化人類学・民族学への学術的要請と社会的要請に関する調査研究

本館の機関研究や共同研究および他機関との連携を通じて得られるさまざまな学術分野からの要請と、フィールドワークの現場などから得られる社会的な要請に関する情報を本センターに集積し、文化人類学・民族学に何が求められているのかを調査しています。

研究戦略の策定と研究体制の整備および研究資料の整備

研究動向調査、学術的・社会的要請に関する調査を通じて得られた情報から、次期の中期目標、中期計画を含む、将来の研究戦略の策定をおこなっています。また、研究戦略に適した研究体制や、研究員制度のあり方を検討しています。さらに、文献図書資料、アーカイブズ資料など、研究に必要な不可欠な資料の整備方法を検討しています。

学術潮流サロンの企画

研究戦略の策定のため、文化人類学・民族学以外の分野の研究動向を把握することを目的に、平成19年度より文化人類学・民族学に隣接する学問分野の研究者を招いて講演の後、参加者と自由に意見を交換する学術潮流サロンを開催しています。23年度は、共通テーマとして「地球sの未来史」を掲げて4回おこないました。

第1回	平成23年10月14日	山本太郎（長崎大学）	「共生—感染症・人・社会」
第2回	平成23年10月28日	山下俊一（福島県立医科大学）	「福島原発事故と放射線健康リスク管理」
第3回	平成23年11月11日	山下雅道（JAXA）	「宇宙農業—火星生命探査と宇宙での暮らし」
第4回	平成23年11月21日	橋本弘蔵（京都大学）	「宇宙太陽発電所—宇宙からクリーンな電気を送る」

研究プロジェクトの企画・立案・運営

機関研究の推進と運営に対する支援、人間文化研究機構の連携研究および他の大型研究プロジェクトの企画・立案

本館の機関研究プロジェクトの企画・遂行を支援するとともに、より効率的な研究体制がとれるようにプロジェクトの再編や実施方法を助言しています。また、人間文化研究機構における連携研究のための研究プロジェクトの遂行を支援しています。さらに、科学研究費補助金、日本学術振興会研究拠点形成プログラム、あるいは民間の財団による研究助成などの外部の競争的資金に関する情報を館員に提供し、全館を挙げて取り組むべき大型の研究プロジェクトの企画・立案をおこなっています。

研究プロジェクト・研究体制の評価

評価システムの整備と活用、実施されている研究プロジェクトの点検・評価

人間文化研究機構が作成する年度ごとの業務実績報告書の機関原案や、中期目標・中期計画の進行状況に対する中間評価、最終評価のための資料を作成しています。また、自己点検や外部評価委員会による意見、大学評価・学位授与機構による中期目標・中期計画にもとづく評価など、本館に関わる評価の結果を今後の研究体制、研究活動の改善に役立てていくための方策を検討しています。実施されている機関研究プロジェクトや共同研究の年次報告、中間報告等を取りまとめ、その活動を点検して、研究支援をおこなっています。

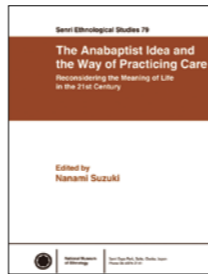
研究連携、研究協力

大学その他の研究機関との研究協力の推進

他の研究機関との研究協力を進めるため、機関研究や研究員制度のあり方を検討、整備しています。

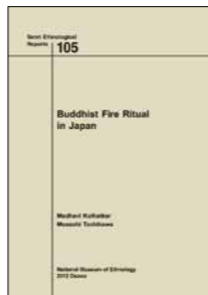
Senri Ethnological Studies (SES)

- no. 77 *Objectivization and Subjectivization: A Typology of Voice Systems*, edited by Wataru Nakamura and Ritsuko Kikusawa
- no. 78 *Irrigated Taro (Colocasia esculenta) in the Indo-Pacific*, edited by Matthew Spriggs, David Addison, and Peter J. Matthews
- no. 79 *The Anabaptist Idea and the Way of Practicing Care: Reconsidering the Meaning of Life in the 21st Century*, edited by Nanami Suzuki



Senri Ethnological Reports (SER)

- 100号 土方久功日記Ⅲ 土方久功著 須藤健一・清水久夫編
- 101号 *Altai Uriankhains: Historical and Ethnographical Investigation Late XIX–Early XX centuries*, Ichinkhorloo LKHAGVASUREN
- 102号 「障害のない社会」にむけて—ウェルビーイングへの問いとノーマライゼーションの実践 鈴木七美編
- 103号 マダガスカル地域文化の動態 飯田卓編
- 104号 東アジアの民族イメージ—前近代における認識と相互作用 野林厚志編
- 105号 *Buddhist Fire Ritual in Japan*, Madhavi Kolhatkar and Musashi Tachikawa



民博通信

- 133号 評論・展望 新しい人文学の創成を目指して—民博の改組と人間文化研究機構のこれから 長野泰彦
- 134号 評論・展望 フォーラム化する文化人類学—大学共同利用機関としての国立民族学博物館が果たすべき役割を考える 佐々木史郎
- 135号 評論・展望 東日本大震災における被災文化財の救援の現場から—有形民俗文化財の支援を中心に 日高真吾
- 136号 評論・展望 経験を受け継ぐということ—マダガスカルの漁村から 飯田卓



国立民族学博物館研究年報2010



国立民族学博物館論集（館外出版）

- 1号 生業と生産の社会的布置—グローバル化の民族誌のために 松井健・野林厚志・名和克郎編



館外での出版物

国内外の出版社から刊行を制度的に奨励しており、昨年度は以下のものが出版されました。

- 社会主義的近代化の経験—幸せの実現と疎外 小長谷有紀・後藤正憲編 明石書店
- グローバル化するアジア系宗教—経営とマーケティング 中牧弘允・ウェンディ・スミス編 東方出版
- 越境とアイデンティフィケーション—国籍・パスポート・IDカード 陳天璽・近藤敦・小森宏美・佐々木てる編 新曜社
- 呪術の人類学 白川千尋・川田牧人編 人文書院
- 捕鯨の文化人類学 岸上伸啓編 成山堂書店



文化資源研究センター

若手研究者を対象にしたプロジェクト

平成18年より「国立民族学博物館の共同利用に関する若手研究者懇談会」を開催し、参加者を公募して開催してきました。21年度からは「みんなく若手研究者奨励セミナー」として実施することになり、23年度も、3日間にわたって同セミナーを実施し、優秀発表者には「みんなく若手セミナー賞」を授与しました。日本全国から国公私立大学在籍の大学院生等11名の参加がありました。また、若手研究者の意見を受けて、20年10月より、試行的プロジェクトとして「若手研究者による共同研究」を開始し、以下のように20年度は2件、21年度はさらに1件を公募により採択しています。なお、22年度からは制度化され、一般の共同研究と同様に公募しています。(13頁参照)

研究代表者	研究課題	研究期間	共同研究員数					計
			館内	国立大学	公立大学	私立大学	民間機関など	
市川 哲	人の移動に注目した場所・空間・景観の文化人類学的研究	平成20年10月～22年9月	0	3	0	6	0	9
石田慎一郎	アジア・アフリカ諸国における裁判外紛争処理の再編が旧来の多面的法体制に与える影響についての共同研究	平成20年10月～22年9月	0	1	1	1	2	5
内藤直樹	<アサイラム空間>の人類学:社会的包摂をめぐる開発と福祉パラダイムを再考する	平成21年10月～23年9月	2	5	0	1	1	9
計			2	9	1	8	3	23

日本文化人類学会などのユーザー・コミュニティとの研究協力の推進

本館のユーザー・コミュニティとして、最も関係が深い学会である日本文化人類学会と平成20年2月27日に連携事業に関する協定書を取り交わしました。みんなく主催の研究集会への協力及び学会が保有する文化人類学映像アーカイブズの処理と保管を連携して実施しています。また連携をさらに進めるため、協定の見直しを行い、個別の事業内容とは別の、包括的な協定である「日本文化人類学会との連携に関する協定」を締結しました。

地域研究コンソーシアムとの連携

地域研究コンソーシアムは、「地域研究」を共通のテーマとするアカデミック・コミュニティの活動体であり、本館は平成18年5月に70番目の加盟組織となり、20年より幹事組織の一員となっています。20年11月8日には、本館との共催により年次集会がもたれ、公開シンポジウム「地域研究の実践的活用—開発・災害・医療の現場から」を実施しました。

研究活動に関する情報収集と研究成果の公開

研究部の活動に関する情報収集と研究年報の編集

本館でおこなわれている機関研究、共同研究、各個研究、科学研究費補助金などの外部資金による研究プロジェクトなど、あらゆる研究活動に関する情報を集積し、データ化して保存しています。また、毎年度研究年報の編集をおこなっています。

研究成果公開プログラムの活用による本館の研究活動の成果公開促進

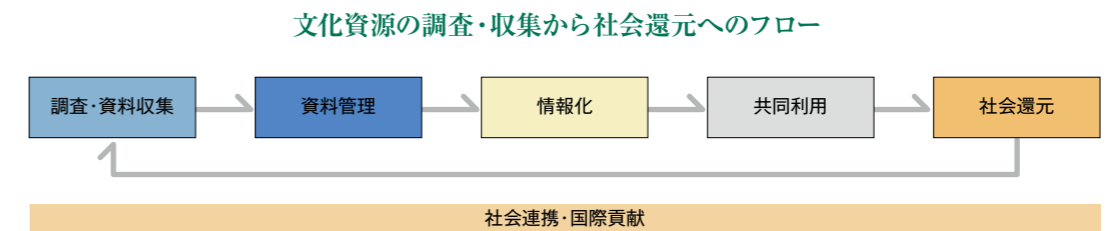
研究成果をより効果的に公開し、社会還元を円滑に図るために、平成14年度に設けた「研究フォーラム促進プログラム」を拡充して、15年度より「研究成果公開プログラム」として位置づけました。本館で行われる共同研究、各個研究などを、シンポジウム、研究フォーラム、学術講演会などの形で公開しています。23年度にはこの制度を活用して、7件のシンポジウム、4件の研究フォーラム、1件のワークショップが行われました。また、毎年東京と大阪で学術講演会を企画し、本館の研究活動の成果を広く社会に還元しています。(18頁参照)

センターの設置目的

文化資源研究センターは、文化資源の体系的な管理と情報化、およびその共同利用や社会還元に向けて調査や研究開発をおこなうとともに、実際に事業を推進する際の企画・調整をおこなうことを目的として、平成16年4月に設置されました。

文化資源には、人間の文化にかかわるさまざまな有形のモノやそれについての情報のほか、身体化された知識・技法・ノウハウ、制度化された人的・組織的ネットワークや知的財産など、社会での活用が可能な資源とみなされるものが広く含まれます。こうした文化資源を人類共有の財産とすることで、グローバル化する世界で人びとが異なる文化への理解を深め、互いに共生していくための基盤を作り出そうというのが、文化資源研究センターのめざすところです。

文化資源は、調査・収集されることでその価値が顕在化され、体系的な資源管理と情報化を経て、共同利用や社会還元に供することが可能となります。これらの各ステップはまた、社会連携や国際貢献の枠組みのなかで推進されます。このような一連のステップは、下図のようなフローの形で表現できます。



各ステップは、それぞれ、諸問題を理論的に解明する「基礎研究」、それにもとづいて方式・体系・技術の開発やそのための予備調査などをおこなう「開発研究」の段階を経て、実際の「事業」として展開されます。

文化資源研究センターは、上記の各ステップに関わる先進的な基礎研究・開発研究と事業推進する際の企画・調整をおこないます。現在、本館では、文化資源研究センターが中心となり、全館的な取組みとして、本館展示の新構築を進めています。開館以来30年余が経ち、世界の状況や学問のありかた、さらには来館者がみんなくに期待するものも、大きく変化しました。こうした変化に対応し、大学共同利用機関としての機能を最大限に活用して、国内外の大学や博物館と共同しつつ、最新の研究成果を広く社会と共有するための展示を新たに構築しようというのが、そのねらいです。新たな展示は、展示に関わる三者、つまり展示の作り手としての研究者、展示の対象となる文化の担い手、そして展示を見る側としての来館者のあいだの、相互の交流と啓発の場、すなわちフォーラムとなることをめざしています。また、これまでの個々の地域文化の特徴を示す展示から、グローバル化の進展にともない、それぞれの地域と世界とのつながりを示すとともに、その動態も映し出す「グローバル展示」の実現をはかります。

文化資源プロジェクト

「文化資源プロジェクト」は、第2期中期目標・中期計画に沿って、大学共同利用機関としての共同利用基盤を整備するとともに、本館あるいは関連する他機関が所有する文化資源の体系化をすすめ、共同利用を促進し、学術的価値を高めるための研究プロジェクトです。平成21年度から外部メンバーの増強をはかり、文化資源共同研究員の制度を導入し、提案されたプロジェクトの審査について、外部の有識者による意見聴取の制度も取り入れました。

各分野プロジェクト相互の関係

